

— 連載 —

# 美術館のある風景 (第12回)

## 横浜トリエンナーレ2014から丸の内へ

三菱地所株式会社 美術館室 恵良 隆二



ドックヤードガーデン (横浜ランドマークタワー)

私の暮らす街「横浜」、その都心部では横浜トリエンナーレ2014（8月1日～11月3日）が開催中です。アーティスト・ディレクターの森村泰昌さんが掲げたテーマは、「華氏451の芸術 世界の中心には忘却の海がある」です。タイトルはレイ・ブラッドベリのSF小説『華氏451度』（1953年）に由来します。華氏451度は紙が自然発火する温度、書物の消滅する世界です。記録に残されていない過去の大切な忘れ物、忘れてはいけない記憶、それらは私達への隠された贈り物なのでしょう。序章と11の章で構成される展覧会は、芸術の持つモニュメンタル性を通して様々な忘れ物に気付かせてくれます。沈黙やささやき、形のない光、子供のままの欲望、漂流する心と身体。一人で世界と対峙する芸術家達が生み出した今も古びない多様な表現、そこには私達に想像と創造を喚起する力があります。

私は横浜市の創造都市政策や芸術文化の振興に係わっていますが、芸術と街との関係や創造産業の振興などのテーマに直面すると、芸術を活用したいと云う計画屋の屁理屈が顔を出します。そんな時、創造への飛翔にはテクネー（技術、知識）とポエム（詩心、感性）の不可分な2つの翼があることを思い起こします。活用と云う手段を考える前に、創造活動の基盤となる環境に眼を向けるのです。自分が生きている街で先人が残してくれ

た芸術作品や今を生きる芸術活動に触れる機会は有難いものです。私たちの生活は、日々新たに上書きされ続ける世界、決して元に戻れない世界を生きることです。芸術に触れて、ポエムの力、創造の源泉の力を感じて自らの活力を得る体験は貴重なものです。美術館は、美術と触れ合う心の交流の広場、或いは、日常から暫し離れて心の再生を図るドック（Dock）でもあるでしょう。美術館の活動する街は、創造力を支えるソフトなインフラストラクチャーを持つ街ではないか。そんな想いにさせてくれる今回のトリエンナーレです。

美術館は、人の心や行動に何かを生起させてくれます。ですから、美術館のプロデュースの力を館外で発揮することや美術と触れ合う機会を広げる努力は、美術館の意義を更に高めることでしょう。私の働く街「丸の内」には三菱一号館美術館があります。良質の展覧会の開催や美術を軸とした人材と情報の交流などに取り組んでいます。やがて美術館が丸の内に欠かせない街の資産となることが期待されるからです。丸の内再構築のキーワードに、オープン、インタラクティブ、ネットワークの3つの言葉があります。誰にも開かれた美術館は、様々な交流を通して美術と人・企業・社会とのネットワークのノード（結節点）となる、そんな現在を生きる美術館の姿を思い描きたいものです。